

授業報告 読む書くN571・N671

— 今後の授業展開にむけて —

高橋 純子

要 旨

2014年春学期、短期留学生を対象とした総合日本語コースにおいて、N500とN600というレベルの異なる「読む書く」の授業を担当した。この授業を振り返り、次学期の授業改善に取り組みたいと思う。本稿では、(1)受講生の特徴、動機付け、(2)読み教材と書く課題との関連付け、(3)特に書く課題とそのフィードバックの方法、などを考察する。

【キーワード】 対象受講生 読み教材 書く課題 動機付け フィードバック

A Report on Two Intermediate Japanese Reading and Writing Classes : toward a new design for teaching reading and writing

TAKAHASHI Junko

[Abstract] This is a report on two intermediate reading and writing classes, N571 and N671, for short stay foreign students in the spring semester of 2014. This paper presents the characteristics of the learners and discusses how to motivate them, what writing assignments related to the reading materials should be given, and how to give feedback on their writing.

[Keywords] learners characteristics, reading material, writing tasks, motivation, feedback

1. はじめに

留学生センターの日本語コースは、2013年より3学期制から2学期制に移行し、大学院生、研究生、日本語日本文化研修生を対象とする補講コースと短期留学生を対象とする総合コースに分かれた。さらに2014年度から総合コースは中級レベルの授業がN400とN500の2つのレベルだったものが、N400、N500、N600、N700レベルと4つに細分化された。N500とN600レベルの「読む書く」の(1)受講生の特徴、(2)読み教材の選択、(3)授業運営におけるいくつかの困難点、注意点などをこの機会に整理し、記述し、今後の授業の改善に役立てたいと思う。

2. 受講生

2014年度春学期「読む書く」N571およびN671の授業の受講生の内訳は以下の通りである。

表1 各クラスの受講生の人数と国籍

読む書くN571 (全8名)	読む書くN671 (16名)
アメリカ (3名)	中国 (4名)
カザフスタン (2名)	スロベニア (4名)
ドイツ (1名)	台湾 (1名)
ペルー (1名)	アメリカ (1名)
ブラジル (1名)	ドイツ (1名)
	カザフスタン (1名)
	ブラジル (1名)
	エストニア (1名)
	リトアニア (1名)
	エジプト (1名)

両方のクラスとも、受講生は2013年秋学期からの継続生が大半で、2014年春学期から加わった受講生はそれぞれ、N571クラス2名(アメリカ、ブラジル)とN671クラス2名(中国、リトアニア)であった。

2.1 N571の受講生の特徴

このクラスは、8名という比較的少人数のクラスであったが、日本語力のばらつきが大きかった。2014年春学期から加わった2名のうち1名は、プレースメントテストの結果、N600のレベルに配置されたが、読む力はまだ弱いのでN500レベルのクラスから始めたいという本人の希望からN571の授業に参加した。日系人の学生で、国では、家で日本語を使う機会が多く、語彙、表現力など、話すことにおいて他の学生より優っていた。もう1

名は、日本語力が他の学生より弱く、学期の始めにN400レベルの「読む書くN471」クラスへ変更し、そちらでもレベルが合わず、またN571に戻るということがあった。

2013年秋学期より継続して留学生センターの授業を受講している「読む書くN571」の受講生は、日本での生活にも慣れ、休みを利用して日本各地を旅行する、日本人との交遊関係も豊かになる、など授業以外での日本語、日本社会との接触が豊富であった。その中で1名、幼少の時に日本に在住しており、聞く力もあり、話すことにも慣れており、流暢に話せるのだが、「書く」技能が著しく弱い受講生がいた。読んだり、書いたりという活字を通しての日本語学習ではなく、主に耳で聞いて理解するという学習方法を経験してきたようである。そのため、本授業で行ったようなまとまった内容のことを書き表す練習は苦手であった。

700レベルの漢字クラスを受講している1名は、日本語力を始め、学習態度においても優れており、この受講生は早期にレベル変更を促すべきであったと反省している。

2.2 N671の受講生の特徴

N571の8名のクラスに比べ、倍の人数の16名のクラスであった。2014年春学期から加わったのは2名で、両名とも授業での課題に積極的に取り組んでいた。1名は聞く力、話す力が2013年度秋学期から継続して留学生センターの授業を受講している学生よりやや劣っていたが、不明のところは授業中によく質問をし、真面目に課題に取り組んでいた。もう1名も積極的に課題に取り組み、他の受講生にもいい影響を与えていた。また、同じ大学からの留学生で、国でも共に日本語の学習をしている4名がいた。全体的に発言も活発で、活気のあるクラスであった。しかし、2013年秋学期から留学生センターでの授業を継続して受講している受講生の中には、クラスメートにも教師にも慣れているためか、教師に対して「です・ます体」で話すべきところがカジュアルな普通体になってしまう、という態度が見られた。

2.3 N571とN671の受講生の共通するところと異なるところ

N571とN671の受講生の特徴的なところは、2013年秋学期から継続している受講生が大半で、仲のよいグループができていることであった。また、約半年間の日本での生活を経験し、日本に関する種々の情報も豊富で、様々なことに慣れてきている。試験だけでは測りきれない日本語関連知識、運用力が高くなってきている印象がある。

日本語レベルに関しては、N571の受講生とN671の受講生では、あまり差がなかったように思われる。N571の成績上位の受講生はN671の授業でも十分な成果をあげたであろうと考える。

N571の成績中位の受講生とN671の受講生の間に線を引くとすれば、漢字力と書く力に

現れていたように考える。そして、N571の受講生の作文ではN671の受講生に比べてひらがな表記が多く見られた。しかし、2014年春学期から留学生センターでN671の授業に参加した前述の聞く力、話す力がやや劣る受講生は、漢字圏からの受講生であったが、授業中には、文法、語彙に関する初歩的な質問も多く見られた。この受講生に比べると、発話力、社会・文化的背景知識などにおいてもN571の受講生の方が優れているところが見られた。

N571もN671の受講生も、大半が課題を期限までに高い完成度で提出してきたが、少数ではあるが、期限を大幅に遅れて提出する、あるいは完成度が低い作品を提出する受講生が見られた。結果としてN671の受講生2名が不合格となった。1名は、“前のレベル(N300)からこのレベルに来て難しかった”、もう1名は、“日本語は就活に関係ないから自分にとっては大切ではない”というコメントを後述する「読み教材アンケート」に書いていた。動機付けの程度を数値化してレベル分けするのは難しいが、技能別授業のレベル配置に関しては、文法レベルを始め、漢字レベルも考慮すべきではないかと考える。

春学期を終えてみて、もし、読む書くN571とN671の受講生に同じ教材で授業をし、読解の成果を比べてみたとすると、上位をN671の受講生が、下位をN571の受講生が占めるとは言い難いという感触を持っている。少なくとも、この2014年度春学期の受講生に関しては、受講生のレベルの入れ替わりが予想される。しかし、書くことでは、N671の受講生の方が若干力があるように見えた。

2.4 「読むJ640」の受講生との比較

筆者は、大学院生、研究生、日本語日本文化研修生を対象とする補講コースの「読むJ640」の授業も担当している。「読むJ640」の受講生と比べると、短期留学生を対象とした総合コースの受講生は、全般的に、読む、書く、聞く、話す、の4技能のバランスがいいと感じている。「読むJ640」の受講生に比べ、話す、書く、という発話力、文章表現力が優れている。これには日本語学習を開始した年齢、日本語、日本関係の専門性などを始め、多くの要因があるだろう。

「読むJ640」の授業では、読んだものに関する内容理解質問の答えの記述に指導の必要を感じることも多い。総合コースのN571、N671の受講生は、概して文法的に正確で、当を得た答えを書いている。読んだものに関する感想、意見もまとまったものを書いている。書くことが学習と考え、楽しんでもいるようだ。発話力も同様に、聞きやすい発音、アクセントで流暢に話せる受講生が多い。

「読むJ640」の授業でも、読んだものの要約を受講生同士で伝え合ったり、書いたりという活動を行っている。授業名が「読む」と特化されている理由もあるかもしれないが、受講生たちは「読む」こと、それを理解することに重きを置いている様子だ。そのためか、読み教材の記述形式の内容理解質問の解答の日本語が不完全だったり、文法的に不正確だっ

たりすることがある。この点において総合コースの受講生の書く日本語は概ね正確であり、完成度も高い。

3. 授業の概要

3.1 読むことの目標

授業の目標は以下の通りである。

- 1) 読むことを楽しむ
- 2) 今まで学習した文法、言葉の知識を使って、様々な読み物を読み、知識を広げ、考え、意見、感想を話し、書くことができるようになる。
- 3) 他の人の意見、感想も聞き、自分の知識、世界をさらに広げていく。
- 4) 登場人物の心理、考えを想像することができるようになる。
- 5) 読んだものの要点をまとめることができるようになる。
- 6) 文体の違いに注意をむける (N571)
- 7) 精密な読解力を養う (N671)

1) から5) は読む授業の基本とも言えることと筆者は考えるため、N571とN671に共通して授業目標とした。6) および7) も、どちらのレベルでも目指したいものであるが、N571のレベルの受講生の方が読む経験がN671に比べ少ないと考え、様々な文体の読み物に触れ、その文体の違いに目を向けさせようと考え、N571での目標に加えた。7) の目標については、N671では、強調表現など、既習の表現で言い替えても大意は変わらないが、その表現を使うことによって書き手の態度、評価が含まれる表現など、微妙なニュアンスの違いを理解させ、読み物をより深く味わい、理解することを目標とした。

3.2 読み教材とその選択理由

以下の読み教材を使用し、各読み教材に関連する書く課題を与えた。読む教材の選択に関しては、今回のN571、N671の受講生とほぼ同じ日本語レベルの受講生を対象にした高橋・鄭 (2014) のアンケート調査結果を参考にした。この調査で、受講生は読解の困難点として「語彙・文法力の不足」を挙げ、読む力をつけるためには「語彙・表現の知識を増やす」ことが必要だと考えていることがわかった。そして、授業で読みたいものとして「語彙・表現がたくさん学べるもの」、「内容が面白く、理解しやすいもの」が求められていた。

3.2.1 読む書くN571の読み教材

以下の読み教材を使用した。

- 1) 「雪女」: 「福娘童話集」 <http://hukumusume.com/douwa/pc/jap/01/22.htm>

- 2) 「きつねうどんとたぬきそば」：『日本語中級読解入門』28課 (1991年アルク)
- 3) 「ここではきものをぬいでください」：『できる日本語中級』9課 (2013年アルク)
「一休さん」：『読解20のテーマ』17課 (1991年 凡人社)
- 4) 「アナと雪の女王」の歌詞：
<http://jplyrics.com/j-pop-lyrics/frozen-let-it-go-pv-kasi-full-mv.html>
- 5) 新聞の投書記事「国を愛する心考えたい」「道徳の教科化やめてほしい」「夢を抱くのは幸せなことだ」「風船届いた奇跡 うれしい」：(2014年3月22日付け 朝日新聞朝刊)
- 6) スマホ関連新聞記事 (1) アンケート調査結果：(2014年3月11日付け 朝日新聞朝刊)
- 7) スマホ関連新聞記事 (2) 新聞投書：(2014年4月27日付け 朝日新聞朝刊)
- 8) 「夜の客」(星新一) (1)(2)(3) (教材を3つのパートに分けて配布)：『たくさんのタブー』新潮文庫 (1981年)

これらの読み物は、読んだ後の書く課題も考慮して選んだ。書く課題については後述する。1) 2) 3) の読み物に関しては、「内容が面白く、理解しやすいもの」という観点から教材を選択した。未習語彙が多すぎて、逐語的に辞書を引いて読んでいくような読み物は避けた。細部にとらわれず、始めから終わりまで辞書を引かずに、読み進められ、おおまかな意味が把握できる読み物としてこれらを選択した。

1) 「雪女」は、N571、N671共通で読み教材として使用した。これは、筆者が2つのレベルの差がどのくらいなのか知るためであった。結果は、あまり差がなく、実はN571の受講生の方がよく理解しているのではないかという第一印象すら持った。おそらく、N571の上位受講生の的確な発言が目立ったためであろう。また、N571のクラスでは、1週遅れて、春学期から留学生センターで受講を始めた受講生が出席した。この受講生は他の受講生と比べると慣れていないせいか、聞く力を始め、日本語力がやや低かった。そして、この教材以降、次第に、書く課題などを通して受講生の漢字力、語彙力などのわずかな差が見えてくることになる。

2) 「きつねうどんとたぬきそば」は、日本語の特徴の一つである長い言葉を短く省略する過程、つまり「たぬき」から「たぬぎ」になる過程が示されていて、受講生の興味をそそるものと考えた。また、きつねとたぬきの持つイメージや「狸寝入り」などの言葉も紹介されていて、情報に富む読み物である。イソップ物語に出てくる賢いきつねとの比較にもつながると考えた。

3) 「ここではきものをぬいでください」では「履物」と「着物」と文の区切りによって2通りの解釈ができることや、「一休さん」では、「橋」と「端」の同音異義語の面白さと困難点、受講生が経験する言葉の言い間違い、聞き間違いの経験を呼び起こすなど、話す、書くという話題提供としても有効であろうと考えた。

4) 「アナと雪の女王」は、N571、N671共通して使用した読み教材である。2014年に公開

され、世界的にヒットしたディズニー映画の主題歌で、この時期、おそらく多くの受講生が耳にした歌であり、この時期だから取り上げたという理由が大きい。そして、この歌詞は各国語に訳されているため、受講生の知っている言語と比べてみることもできると考えた。当時、話題になっていた各国語の翻訳の歌詞とアニメの口の動きの対応がいかになまくなされているかというところもN671の授業で実際に映像と一緒に確かめることもできた。しかし、N571の授業で使用した教室は、PCが使用できず、映像を見せることができなかったため、受講生には、各自ネットで確認するよう伝えたのみであった。

5) 「新聞の投書記事」は、小学生、中学生によって書かれた新聞の投書欄からの読み物で「です・ます体」と「だ・である体」の対比がはっきり示せるため選んだ。また新聞の投書であるから短い文章で、よくまとめられていて意見がわかりやすい。これを読み教材として選択した一番の狙いは文体の違いを見ることであった。

6) スマホ関連新聞記事 (1) アンケート調査結果は、スマホ使用に関するアンケート調査結果と問題提起で、それまで扱った物語、説明文、意見文とは違うジャンルのものから教材を提供しようと考えた。

7) スマホ関連新聞記事 (2) 新聞投書は、スマホ使用問題に関連したもので、母親がスマホを持っていない娘が学校で仲間はずれになっていることについて、その不安を投書したものである。日本での学生のスマホ使用の問題点を紹介し、受講生の携帯やスマホに関する意見を喚起しようと考えて選んだ。

8) 「夜の客」(星新一)は、星新一の作品の中でもやや長い話であるが、同じような場面の繰り返しが多く、先を予測するのが比較的簡単で、読み進むうちに同じ語彙が何度も出てくるため、語彙習得が容易になるという利点がある。それでいて、先を読みたいという娯楽性に富んでいる。また、タクシー運転手と客との掛け合いの会話は、話す力の優れた受講生にとっては、その力を試すよい教材になるであろうと考えた。また、ある程度の長さのある作品を読み切ることで達成感を受講生に感じてもらいたいとも考え、選んだ。

3. 2. 2 読む書くN671の読み教材

以下の読み教材を使用した。

- 1) 「雪女」：「福娘童話集」<http://hukumusume.com/douwa/pc/jap/01/22.htm>
- 2) 「ボッコちゃん」(星新一)：『中上級者のための速読の日本語第2版』(2013年 ジャパンタイムス)
- 3) 「アナと雪の女王」の歌詞：
<http://jplyrics.com/j-pop-lyrics/frozen-let-it-go-pv-kasi-full-mv.html>
- 4) 「禍転じて福となす」(ピーター・フランクル)：『美しくて面白い日本語』(2002年 宝島社)
- 5) 「俳句・川柳・標語・なぞなぞ」：第一生命のHPサラリーマン川柳、複数のなぞなぞのHPから選択したものを編集したもの。

6) 「たのしい制約」(佐藤雅彦):『毎月新聞』(2003年 毎日新聞社)

N571の読み教材選択と同様、読んだ後での書く課題も考慮し、これらの読み教材を用意した。

1) 「雪女」は、N571で述べた。

2) 「ボッコちゃん」は、内容、展開は、奇抜で興味深いのだが、受講生にはあまり馴染みのない語彙・表現が多く出てくる。これら进行处理するのは、N671の受講生の方が適していると考えた。この読み物もN571で使用した8)「夜の客」同様、先を予測する読み物として適していると判断した。

3) 「アナと雪の女王」は、N571で述べた。

4) 「禍転じて福となす」はエッセイで、中級で学ぶ文型に富んでいる。諺や四字熟語の導入にしようと考えたのと、諺、四字熟語をタイトルとしたエッセイを書かせようと考え選択した。比較的短い作品で、読みやすい。また文脈で指示詞の指し示すものを答えさせる練習としても適切であった。指示詞の指し示すものは何かという問いには、指示詞の部分进行他の言葉で入れ替えても文章として成り立つ形で答えるよう指示した。

5) 「俳句・川柳・標語・なぞなぞ」は、N571での「ここではきものをぬいでください」「一休さん」に相当する言葉の遊びの要素を持った内容のものを教材にしようと考えた。さらに日本文化を学べる内容として、この「俳句・川柳・標語・なぞなぞ」を選んだ。五七五の日本語のリズムを体得することも目的であった。川柳では、「パパがいい、それが今ではパパはいい」など「は」と「が」の使い方大きく意味が違ってくることなど、日本語の面白さを伝えるのにふさわしい教材だと考えた。俳句や川柳の創作へと発展させようという計画であった。

6) 「楽しい制約」は、アカデミックな雰囲気のものを読み教材に入れたいという意図から選んだ。説明文の要素も持つ、エッセイである。読み物の背景知識として「朝礼」について知っているかが問われる。また、筆者の心の動きを描写するという課題も与えることができる読み教材である。

3.3 N571とN671の授業の流れ

N571、N671の両クラスで、読み物ごとに、ワークシートと小テストを作成した。以下、一つの教材を扱う大まかな手順である。一つの読み物は、長さにもよるが、だいたい2コマを使用した。

1) 新しい読み教材に入る前の週に、読み教材とワークシート(以下WS)を配布する。受講生は、予習をしていくことになる。

2) WSの始めには「読む前に」という読み教材のテーマに関連した質問がある。読み教材のテーマに意識を向けるためのもので、小グループで、あるいはペアでその質問につ

いて意見交換を行う。

3) WSには、本文中に出てくる語彙・表現・文型などの意味、用例が示されていて、適当な語彙・表現を入れる穴埋め問題や、提示された文型を使った文完成問題、読み物の内容理解質問などがある。これを3～4名の小グループで答え合わせをし、読み教材を声を出して読む練習もグループで行う。さらに、読んだものに関しての感想、意見交換を小グループで行う。

4) クラス全体で、WSの答えの確認をし、語彙・表現、文型などに関する質問を受け、教師が答える。あるいは、教師が確認の質問をする。読み物の内容理解質問の答えを確認し、受講生からの質問に答える。受講生が読み教材の音読をして、教師は読み方の確認、つまり漢字の読み方、アクセント、イントネーションなどの確認、修正をする。

5) 読み教材に関しての意見、感想などをクラス全体で話し合う。

6) 小テストを実施する。一つの読み物を終了した翌週、読み教材に出てきたもので、よく使われる漢字語彙の読み方、新出語彙、表現などの使い方、など言語知識を問う小テストを実施した。ただし、「ここではきものをぬいでください」「一休さん」「アナと雪の女王」「夜の客」「俳句・川柳・標語・なぞなぞ」では、小テストは行わなかった。既習語彙や文型が多く、小テストをする意味がない、作品が短かすぎて小テストを作成する題材がない、長い作品を読み進めることを優先し、区切って小テストをすることで、読む意欲を削がない方がいいと考えたため、作品を楽しむことが第一の目的であるため、小テストがふさわしくないと考えたというのがそれぞれの理由である。

7) 次回の読み教材とWSを配布する。そして、上述の2)の活動を行う。つまり、次の読み教材のテーマに関する受講生の考えを活性化するため、WSの「読む前に」の質問について小グループで話し合う。時間があれば、WSの語彙・表現・文型のところを小グループで読み、質問に答える。そして、翌週3) 4) 5)と続ける。

3.4 書く課題

N571、N671では以下のような書く課題を与えた。

1) 各読み物のワークシートの文章完成問題、および記述式の内容理解質問に答える。

(N571、N671共通)

2) 「雪女」「ボッコちゃん」「夜の客」など途中まで読み、物語のその後の進展を書く。

(N571、N671共通)

3) 「きつねうどんとたぬきそば」では、読んだものに関する感想、意見を書く。(N571)

4) 「禍転じて福となす」では、ことわざや四字熟語を一つ選び、それをテーマにしたエッセイを書く。(N671)

5) 新聞投書記事を書く。(N571)

6) 俳句、または川柳を作る。(N671)

3.5 書いたものを共有する活動

N571の授業では、作文の朗読会を行った。8名という小規模クラスであったので、「きつねうどんとたぬきそば」と「新聞の投書記事」では、受講生の作文を添削した後、書き直させ、クラスで朗読してもらった。他の受講生の感想、考えを共有し、意見交換をするためである。期限までに提出がなかった受講生の作品は残念ながら、皆で共有できなかった。

N671の授業では、俳句会を行った。「俳句・川柳・標語・なぞなぞ」の読み教材を終わってから、受講生に俳句、または川柳を作る課題を与え、期日までに提出された俳句、川柳を一覧表にして、配布し、机をコの字に並べ替え、教師が俳句会形式で披講した。俳句も川柳もどちらの作品もよしとした。作品を作ることに意義があると考えたからである。提出のない受講生もいたが、一人で5句も作ってくる受講生もいた。

4. 受講生による読み教材の評価

4.1 読む書くN571

学期の終わりに、使用した読み教材を「面白さ」「難しさ」「役に立つ」の3つの項目で評価してもらった。8名のうち7名が回答した。

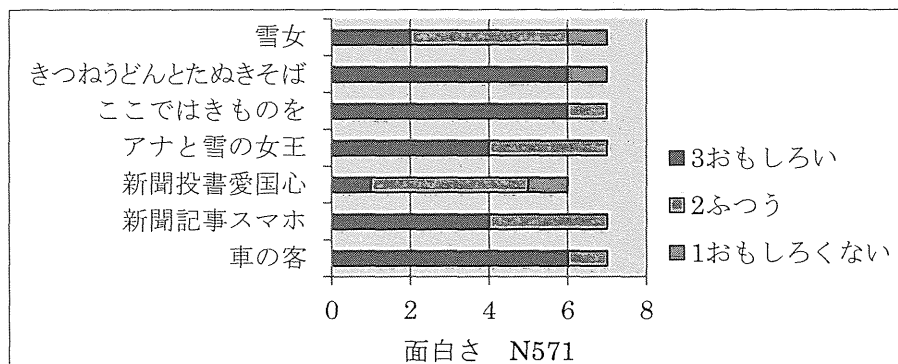


図1 読み教材の評価「面白さ」N571

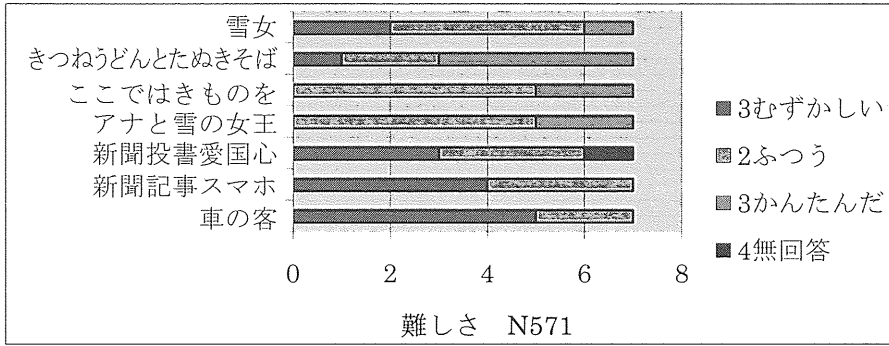


図2 読み教材の評価「難しさ」N571

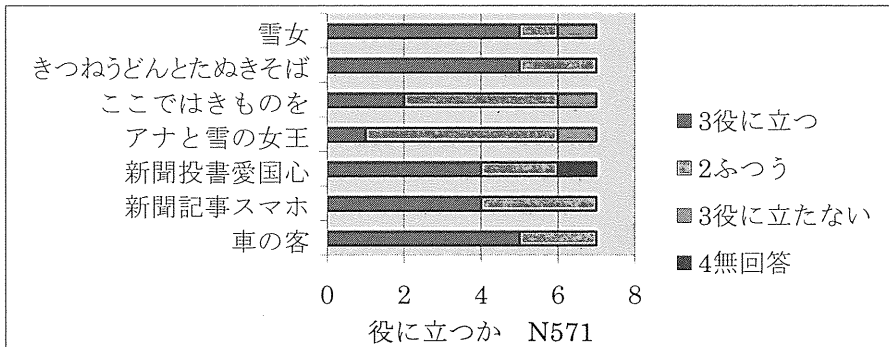


図3 読み教材の評価「役に立つか」N571

4. 1. 2 難しくないが面白くて役に立つ／役に立たない

「たぬきうどんときつねそば」と「ここではきものをぬいでください」は、「簡単だ」という回答が多かったが、「面白さ」では評価が高かった。「たぬきうどんときつねそば」については感想を書く課題を与えた。ほとんどの受講生が日本の名前の付け方に興味を示し、“自分の国だったら、このような名前を付けることがないだろう。使われている材料の名前を付けるだろう。”という感想が多かった。日本の名付け方法について、新たな発見があったようだ。新たな情報を得るとい意味で役に立ったという回答が多かったようだ。

「ここではきものをぬいでください」は、言葉の遊びをテーマにしたもので、難しい読み物ではないが、「面白さ」の評価は高かった。この読み物では、メール文で文字変換が間違っ、誤解を生むというエピソードが紹介されているのだが、それが受講生の経験と重なるらしく“おもしろかったです。日本人の友だちもメールでけっこうああいうまちがいをしているから”というコメントがあった。短い文章で、言語的にはあまり学ぶことがなかったためか、「役に立つ」では評価が低かった。

「アナと雪の女王」も難しくないが、「面白さ」の評価は高い。しかし、「役に立つ」では評価が低い。“話題の歌の歌詞がわかってよかった”というコメントと“どこへ行ってもこの歌を聞くのであきた”というコメントがあった。

4. 1. 3 難しいが面白くて役に立つ

短編ミステリー「車の客」は、「面白さ」「難しさ」「役に立つ」の3つで評価が高かった。コメントとして“サスペンスがあつてよかった。わかりにくいところもありましたが”“ふしぎなことについて話すことができてよかったです。さいごはどうなったのかを知りたくなりました。”という内容に関するものと“知らないことばをいっぱい習った”という言語に関するコメントがあった。

「新聞記事スマホ」についても“私もスマホ中毒だから面白かった”“日本人の意見を読むのは大切”というコメントが見られ、今の日本社会の動向に興味を持っている様子、自分の経験と照らし合わせて記事を読んでいる姿が見えた。

4. 1. 4 あまり面白くないが役に立つ

「新聞投書記事」は、「です・ます体」で書かれた投書と「だ・である体」で書かれたものと両方があった。文体の違いを見せるという意図で選んだものだが、読み物としては「面白くない」という回答が多かった。しかし、この話題で、グループでディスカッションをしたのが印象的でよかったというコメントが2つあった。

「雪女」も難しくなく、面白さの評価も高くないが、半数以上が「役に立つ」と回答している。上記の「新聞投書記事」も「面白さ」では評価が低い、「役に立つ」では評価が高くなっている。「ここではきものをぬいでください」「アナと雪の女王」以外の読み物は「役に立つ」の回答が半数を超える。面白くても、文章が短くて簡単なものはあまり役に立たないが、それ以外ならどのような読み物でも受講生にとっては「役に立つ」と言うわけだろうか。N500レベルの受講生は、何を読んでも、学ぶことがまだ多くあると感じる段階なのだろうか。

4. 2 読む書くN671

N571のクラスと同様、読み教材の評価をしてもらった。受講生16名全員からの回答を得た。

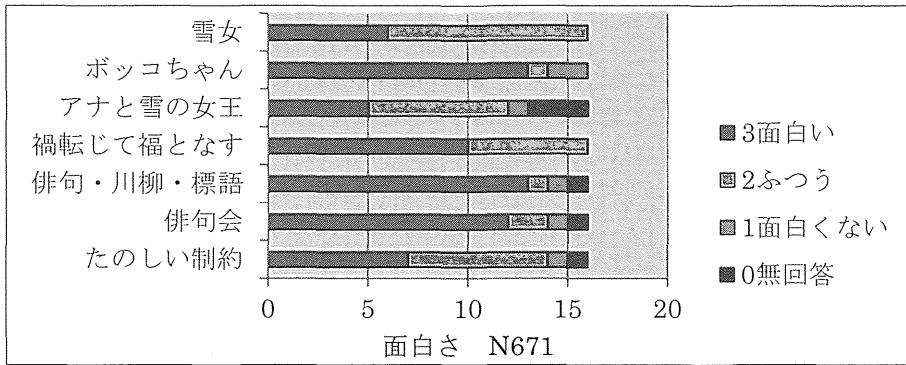


図4 読み教材の評価「面白さ」N671

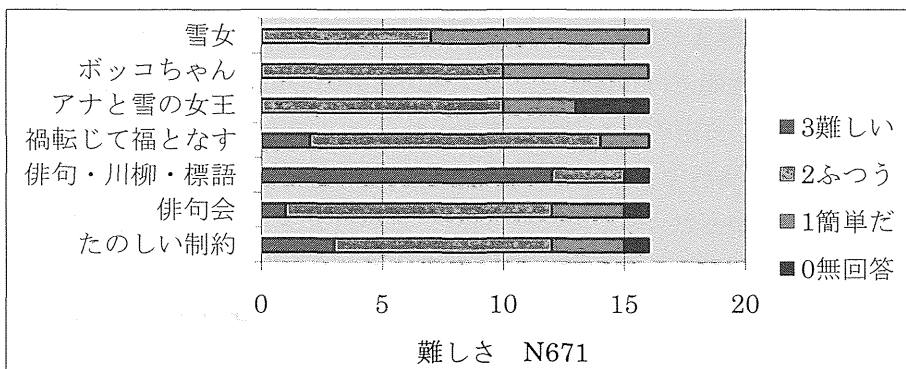


図5 読み教材の評価「難しさ」N671

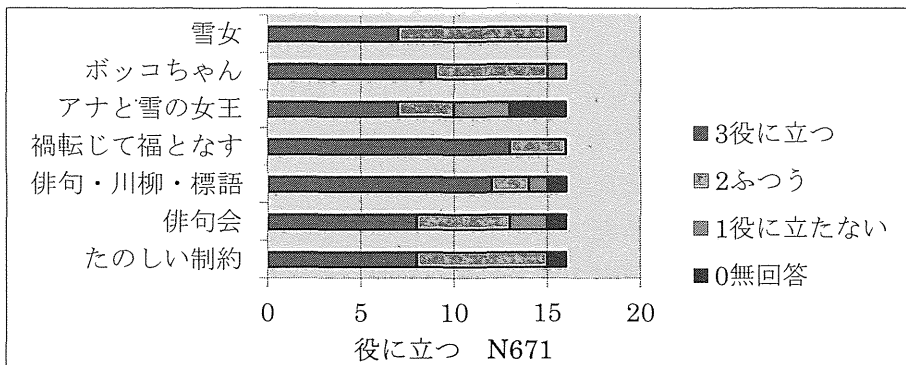


図6 読み教材の評価「役に立つか」N671

N671の授業で用意した読み教材は全体的に「難しさ」の評価が低い。そして、「面白さ」と「役に立つ」の評価に正の相関が見られる。最初に使用した「雪女」の読み物でN571とN671のレベルの違いを見ようとしたのだが、そこであまり差が見えなかったこと、読み物に付随した書く課題を考慮して読み物を選んだこと、などが難易度の低い読み物を

選んでしまった原因かと考える。

「面白さ」「難しさ」「役に立つ」で評価がそれぞれ高かったのが、「俳句・川柳・標語」であった。コメントが一番多く書かれているのもこの教材に関してであった。2名からそれぞれ“俳句は除いたほうがいい”“読むのは面白かったけど、私のせんもんとあまりかんけいがないからあまりきょうみがありませんでした”という否定的コメントがあったが、“川柳はとてつてもヒュモアもよかつたし、自分で俳句を作つてみるのは楽しかつた”“俳句と川柳は面白いです。特に川柳、日本人のつっこみはすごいと思ひます”“外国人にとつて時々わかりにくいと思ひうが、面白かつた”という肯定的コメントがこの他に3件あつた。

「俳句会」は受講生の創作した俳句・川柳を披講し、評価する活動であるが、受講生の作品を読む、という意味で読み物評価の項目に入れた。これは、「難しさ」では評価が低い、「面白さ」では評価が高くなつてゐる。“初めて勉強するので、とてつても面白かつた”“他の学生からの感想聞くのが役に立つた。他の学生の俳句を読むのが役に立つた。”というコメントを含め、肯定的なものが5件あつた。

「役に立つ」という項目で一番評価が高かつたのは「禍転じて福となす」であつた。“諺を勉強するのが面白かつた(ので役に立つた)”というコメントが4件見られた。読み教材に出てくる諺だけでなく、他の諺、四字熟語なども合わせて学習したこと、諺や四字熟語をタイトルにしたエッセイを書いたこと、などが評価に影響を与えてゐるとも考えられる。

5. 評価項目「役に立つ」

「役に立つ」を受講生がどのような基準での評価してゐるのだろうか。コメントから探つてみると、N571、N671に共通して「知らないことば」「新しい表現」など言語知識を習得できたかどうか、「今まで知らなかつたこと」「今話題になつてゐること」「日本の文化・社会に関する知識」を得られたという情報収集、「自分も同じような経験をしてゐる」という共感が基準になつてゐるようだ。そして、これらの要素は「面白い」にも繋がる。「難しさ」はこの点において、今回はあまり影響がなかつたようだ。しかし、N571の方が、「面白さ」の評価が低くても、「役に立つ」と回答する例がやや多かつた。

6. 反省点と今後の課題

6.1 読み教材

全体的に読み教材が簡単すぎたと言えよう。N571、N671の両クラスで「面白い」「役に立つ」で評価が高かつた教材は「難しさ」においても点数の高い「車の客」「俳句・川柳・標語」であつた。もっと読み応えのある作品を開拓する必要があるとそうだ。実際、N671の受講生から“もっとアカデミックなものが読みたい”というコメントがあつた。

授業に緩急をつけようと、簡単にさっと読み切れる教材「一休さん」「ここではきものをぬいでください」「アナと雪の女王」を長い読み教材の前後に入れたのだが、「役に立たない」までも「面白い」と受け止めてくれれば筆者としては満足であった。本授業の学習目標の第一は「読むことを楽しむ」だからである。

6.2 書く課題

6.2.1 受講生の書く意欲

書く課題に関して、今回のアンケート調査では、特に質問を設けなかった。受講生は、読み教材アンケートに答える際、書く課題、授業活動も思い出しながら回答したものと考えられる。読み教材の評価の欄にいくつか書く課題に関するコメントが書かれていた。N571でもN671でも、物語の続きを想像して書くという課題を与えた。N571では「雪女」「車の客」、N671では「雪女」「ポッコちゃん」それぞれ2つの作品の展開を書かせた。N571では1名“つづきを書くのはみんながきらいです”というコメントを寄せていたが、N671では“自分でストーリー、考える部分はとても面白かったです。”“私は書くの好きだけど、日本語で物語を書くことが苦手なので、ポッコちゃんのようにもっと書いたほうがいいかなと思います。”“5つの文に分けて、自分のつづきを書くのは楽しかった。”というコメントがあった。読むことに関しては、N571とN671で日本語力の差があまり見えなかったが、書くことに関しては、N671の受講生の力が優っていたようだ。N571もN671も書くことを楽しんでいる受講生が多く見られたように思うが、この点に関しては、課題だから仕方なく書いているのか、書くこと、創作活動が好きなのか、探ってみたいと思う。

6.2.2 書く課題へのフィードバック

受講生の書いたものへのフィードバックは、教師の添削とコメントが主であった。第1稿を添削し、完成度の高いものはそのまま返却したが、誤りの多いものや、完成度の低いものは訂正して再度提出させた。受講生の少ないN571のクラスでは、書いた作品を授業で読んでもらうという活動を行ったが、N671の授業では人数が多いため行わなかった。その代わり「俳句会」を行い、受講生の詠んだ俳句と川柳を披講し、点数を競った。高得点の作品から順に、選句理由、感想を受講生に述べてもらった。俳句会形式にのっとり、改まった雰囲気で行ったためか、選句理由の述べ方もいつもの授業でのそれとは違い、受講生は言葉を選んで発言していたように思う。1回のみを試みであったが、“俳句会の形式が好きです”とコメントもあり、楽しい会であった。

自分の思い、考えを読者に伝えるという意味において、書くということはコミュニケーションの一つである。今回は受講生の作品の主な読者は教師であった。上述のN571の朗

読会、N671の俳句会のように、教師以外の読者を組み込む仕組みを取り入れて行きたい。受講生の書いた作品をクラス全体で共有し、感想を述べ合う時間を次回は多く設けようと考えている。

6.2.3 書く課題のバリエーション

基本的に読み教材が先行し、それに関連した書く課題を与えるという形式で授業を展開した。この授業展開のよい点は、読み教材に出てくる語彙、文型を使って書くことで、語彙、文型の定着が図れるところである。

しかし、書く課題のバリエーションをもっと豊かにしたいと考える。読み教材の後を追うだけではなく、読み教材に先行した形で書く課題を与え、読み教材の筆者との考えの違いを比べる、絵画、映像から場面描写、人物描写の文章を書く練習をする、4コマ漫画を物語に書く練習をする、他の受講生の書いた作品の続きを書く、文体を変えて書く、ある事柄に関して異なる立場の複数の人物からの視点で書く、ある制約を与えて書く、など様々な活動があるだろう。

そういう意味で、今回の授業は、全体的に「読む」ことに比重がかかりすぎていたかもしれない。本授業の目標は1) 読むことを楽しむ、となっている。筆者は書くことを入れていなかった。次回は1) 読むこと、書くことを楽しむ、としたい。

6.2.4 動機付け

書く課題の提出がはかばかしくない受講生への動機付けをどうするか考える必要がある。読み教材に付随するワークシートは提出するが、それ以外のエッセイや物語の続きを書く課題などは、ほとんど提出のない受講生が少数ではあるが存在した。教師からの働きかけが弱かったのかもしれない、と反省している。秋学期から継続して授業を受けているのだから、授業で何をすべきなのかもう既に知っているはずだ、という思い込みが教師にあり、指導が甘くなったかもしれない。

前述したが、読み教材アンケートに“日本語は就活に関係ないから自分にとっては大切ではない”“前のレベル(N300)からこのレベルに来て難しかった”という記述があった。これらの受講生を始め、個々の受講生の背景に関して、早期に情報を得て、個別の対応をしておけばよかったと反省している。

7. おわりに

本稿は、2014年度、総合日本語コースの春学期の授業について報告したが、春学期と秋学期では、異なるところが多いと予想する。秋学期は、日本社会にも、留学生センターの日本語コースにもまだ不慣れな新規の受講生が多く、より丁寧な説明、指導が求めら

れるであろう。春学期は、秋学期から留学生センターで継続して学んでいる受講生が多く、彼らは、半年の日本滞在の間に様々な経験をする。日本社会、地理、交遊関係などいわゆる教科書にはない知識を身につけ、様々な体験もしている。同じレベルの授業を担当するとしても、新規生と継続生の違いを念頭においておく必要があるだろう。

参考文献

高橋純子・鄭聖美（2014）「読むJ600 教材の最適化を目指して—アンケート調査結果の報告—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』29号：189-204